

日本の若年独身者における親密性
—性行動内容に注目して—

大 森 美 佐*

The Meaning of “Intimacy” among Young Japanese Single People
with Focusing on Sexual Behaviors

OMORI Misa

Abstract

This study investigates the meaning of “intimacy” between young Japanese single people by focusing on how they communicate with the opposite sex including detailed sexual behaviors, which are not only inter-course sex but also holding hands, kissing and more in Japanese culture and society. The result was derived from 5 group discussions and semi-structured interviews conducted with 22 highly educated and employed single man and women between 2012 and 2016 in the city of Tokyo.

The main findings can be summarized as follows: (1) it has been believed that the sexual norms were deinstitutionalized and people can perform their sexual behaviors freely. However, young Japanese people still establish “intimate relationship” under the romantic love ideology. (2) In order to maintain the ideal of “romantic love”, they control their sexual behaviors especially with not doing inter-course sex (3) Male interviewees are feeling the heavy responsible for sexual behaviors therefore they tend to avoid have inter-course sex in the case they do not want to make the relationship serious.

Keywords : intimacy, sexual activities, deinstitutionalization, sexual exclusivity, gender distinction

I. 問題背景と研究関心

本稿では、これまで恋愛と密接な関係にあると認識されてきた「性関係」を、若者たちがどのように認識し、意味付けているのかに注目する。現代的な恋愛に関する先行研究では、その特徴が代替不可能な恋愛や通過儀礼としての恋愛から、恋愛とそうでない関係との境界が曖昧なもの（山田1994；草柳1996；谷本2008）へと移行してきたと指摘されている。例えば、「セックスフレンド」、添い寝だけの男女関係を意味する「ソフレ」、「付き合う」ことの相互承認により排他的な性関係の契約を結ぶカップル（大森2014）など、今日の若者たちの親密な関係性には様々なかたちが存在しその時々々の文脈によっても意味付けは異なる。ゆえに、近代家族を支えてきた「性—愛—結婚」の三位一体イデオロギーの影響力は弱まり、個々の要素の独立性が強まるとともに、人々に「性関係」に関する多様な選択肢を与えていると考えられている。

しかし、少子化問題や配偶者選択研究をはじめとする恋愛や結婚に関するこれまでの研究では、愛情と性は「親密性」という関係のなかに常に包摂され、両者の関係性は問われることなく前提にあるものとみなされてきた。つまり、夫婦であれば、あるいは、恋人同士であれば性関係があるはずだ、という前提である。そのような研究の現状に鑑み、日本の社会や文化の文脈のもとで、「親密性」とセックスがどのように関わっているのか、

キーワード：親密性、性行動、脱制度化、性的排他性、ジェンダー差

*平成25年度生 人間発達科学専攻

セックスをする／しないという単純な二分法に留まらず、若者たちの性に関する詳細な行動内容（例えば手をつなく、キスをする、性交渉など）を把握し、「付き合う」ということへの意味づけに注目することを通して、彼らにとっての「親密性」のあり様を質的データの分析を通じて考察することを目的とする。

Ⅱ. 先行研究

ギデنزは、後期近代以降の社会における親密性は、制度や伝統によって担保されてきた愛情関係ではなく、積極的な自己開示を通じたコミュニケーションによる「純粋な関係」へと変容したと仮定している（Giddens 1990=1993）。また、そうした背景には、生殖技術の精緻化の過程がある。「セクシュアリティにとって最終的な〈解放〉」を意味する性と生殖の分化によって、「セクシュアリティは完全に一人ひとりが有し、他者と互いに取れあわず関係の特性となりうる」(Giddens 1990=1993: 47)。このように「生殖や親族関係、世代関係との古くからの一体的結びつきから切り離された」セクシュアリティをギデنزは「自由に塑型できるセクシュアリティ」と称し、「今日、愛情とセクシュアリティは、純粋な関係性を介して一層強くむすびついている」と論ずる。もし、こうしたギデنزの議論が妥当ならば、若者の親密性を探るうえで、若者たちのコミュニケーションの諸相や愛情と性との結びつきを丹念にみていくことは、より一層重要なことといえるだろう。

近代から後期近代への移行に伴い、個人の性は自由化し、セクシュアリティのあり様は多様化している。親密性に関する研究の蓄積は、日本に比べアメリカの方が豊富である。具体的には、結婚への移行などの伝統的な研究に加え、同棲や事実婚、妊娠先行型結婚やインターネット・デーティング、あるいは“hooking up”と呼ばれるようなカジュアルな性関係など、親密性の研究はより多様なテーマを扱い、複雑さを増している。しかし、アメリカの家族社会学では、これら全ての関係を包括する共通のコンテキストは、感情的 (emotional) であれ、性的 (sexual) であれ、親密性への欲求である (Sharon 2010) と指摘される。ゆえに、英語の“intimate relationship”とは、ほんらい性愛を含む関係性に限定されるものではないが、多くの場合、性的関係を示すことが多い (筒井2008; 田淵2013) という指摘にも合点がいく。それだけにセックスという事象がカップル関係においては重要なファクターとして捉えられており、カップルとセックスに関する研究は家族研究においても重要な位置を占めているのである。

日本の研究に目を向けると、筒井 (2013) は、「親密な関係」を、「相互行為の蓄積を通じて、お互いがお互いの情報を知り合っているような関係」と定義し、そこには知人、友人関係、恋愛関係、同棲、結婚などが含まれるとする。ただし筒井は、恋愛関係や結婚、同棲にはセクシュアリティが含まれ、排他的な関係であるとして、友人関係など他の親密な関係性とは区別して扱っている。

ところが、1990年代以降の恋愛論では、性的関係の存在は「恋人」と「友人」とを区別する一応のメルクマールになっているものの、他方でそういった区別を無効化するような、いわゆる「セックスフレンド」や「友達以上恋人未満」などの言説が登場したと言われている (谷本2008)。一方で、石川 (2007) や永田 (2008) による研究では、恋愛に何よりも高い価値を見出す若者は、恋愛相手とのセックスを当然視するという知見も示されている。さらに大森 (2014) は、現代の若者たちにとって、恋愛関係を築くには「付き合う」という関係を明確にする必要があり、「告白」に応じて「付き合う」ということは、性的関係を結ぶことを相互に承認し合う「契約関係」にあると認識していることを明確にした。このように、現代においても未だ恋愛、あるいは愛情と性との強い結びつきを実証した研究もある。

しかし、これらの先行研究の多くは、主にセックスを「する／しない」の事象のみに注目し、それぞれの行為選択の背景にある個人の意識や行為内容の詳細は十分に検討してこなかった。さらにいえば、特定個人においても、付き合っている人の有無や付き合いの真剣さの度合いなどの状況の違いにより、セックスの価値や意味づけ、行為内容は異なるはずであるが、そうした恋愛行動の多様性を考慮した分析は十分にはなされていない。そこで本稿では、個人の主観的意味づけやコミュニケーションの内実などを、質的な調査及び分析方法により解明したい。

Ⅲ. 研究の対象と方法

(1) 調査対象者

本研究が用いるデータは、2012年3月から2016年8月まで行った、次の2つの調査から得られたものである。ひとつは、メインとなるフォーカス・グループ・ディスカッションのデータであり、もうひとつは、補足的に行った個別インタビュー調査でのデータである。調査対象者は、1987年から1993年までに生まれた、調査時に20歳代の未婚男女で4年制大学卒業者かつ正規雇用者である。また、性的指向性については、今回は対象を「異性愛者」に限定した。そのうえで、グループ・ディスカッションのメンバーは、性別の組み合わせによる話題や対話進行の差異を考慮して、女性社会人（W）、男性社会人（M）、異性混合（異性混合グループのうち男性メンバーをMixM、女性メンバーをMixWと表記）の3カテゴリーに分けて設定した。調査対象者の選定は、スノーボール・サンプリングにより行い、その結果、22名が調査対象となった（表-1）。また、グループ・ディスカッションの実施前には、各参加者に基本的な属性（氏名、性別、年齢、職業など）と交際歴について用紙に記入してもらい、その後、1人ずつ簡単な自己紹介をした上で、調査を開始した。司会者は筆者が務め、会話の発展が必要であると判断したときにのみ限定的に介入した。

インタビューの語りは、グループ・ディスカッションの会話データと区別するため、ケースIDに「PI (Personal Interviewの略)」をつけ、筆者の発言には「筆者」と記述することにする。ディスカッション及びインタビューの所要時間は、それぞれ2時間程度、1～4時間であった。なお、本調査の一部はお茶の水女子大学人文社会科学倫理審査委員会において調査の認可を得ている。

(2) 分析方法

分析に際して、全文トランスクリプトを作成し、そのなかからセックスに関わる行動とそれらの行動選択の背景について語っていると思われる語りを全て抽出した。その後、調査対象者の間で共通にみられた語りを、本稿では調査対象者たちによる「意味づけ」や「意識」（規範も含む）を裏付けるものとして分析対象にした。また、分析の際には、語りを文字通りの意味として捉えるのではなく、語りの前後にある文脈や言い淀み、声の強弱などを総合的に考慮しながら行った。しかし、それらの詳細な情報の記述は本稿では省略している。さらに、恋愛における個人の状態（交際相手がいる／いない）とジェンダーの視点からそれらの語りにどのような差異がある

表1-インフォーマント

女性グループ1						女性グループ2					
ID No.	年齢	職業	交際	過去交際	結婚願望	ID No.	年齢	職業	交際	過去交際	結婚願望
W1-a	23	広告	無	有	有	W2-a	27	行員	無	有	有
W1-b	24	販売	有	有	有	W2-b	26	メーカー	無	有	有
W1-c	24	営業	無	有	有	W2-c	26	番組配信	無	有	有
W1-d	25	営業	有	有	有	W2-d	26	NPO団体	無	有	有
W1-e	22	番組制作	有	有	有	男性グループ2					
W1-f	24	物流	有	有	無	ID No.	年齢	職業	交際	過去交際	結婚願望
W1-g	24	専門商社	有	有	有	M2-a	26	不動産	無	有	有
男性グループ1						M2-b	26	IT	有	有	無
ID No.	年齢	職業	交際	過去交際	結婚願望	M2-c	27	公務員	無	有	有
M1-a	22	接客業	無	無	有	異性混合グループ					
M1-b	25	警備業	無	有	有	ID No.	年齢	職業	交際	過去交際	結婚願望
M1-c	22	人材	無	有	有	MixM-a	26	IT	無	有	無
M1-d	24	技術営業	有	有	有	MixW-b	26	メーカー	無	有	有
M1-e	22	技術者	有	有	有	MixW-c	26	IT	無	有	有

のかに注目した。

IV 語りの分析

(1) 親密な関係における排他性と性行動

対象者たちの「付き合う」という契約関係（大森2014）は暗黙の裡にカップル関係の排他性を前提としており、その最たるものとしてセックスが位置づけられていた。この排他性は、カップル関係を拘束するだけでなく、周囲の他者がこれを冒すこともタブー視していた。以下は、男性グループ1での会話である。

M1-c: *ここ2年間好きな人いないんすよね。*

筆者: *好きな人が現れない?*

M1-c: *好きな人、1人2人いたんですけど、どっちとも彼氏いたんで。*

筆者: *彼氏いたらなんでダメなの?*

M1-c: *えー?それは倫理。モラル。*

M1-b: *僕もダメ。いたら引くほう。それも運命なのかなって思うんすよね。相手には付き合ってる人がいてしょうがないって。その人が普通の友だちだったらお話をする仲間だろうなっていう。*

以上のように、M1-cは、女性を好きになることはあってもそれ以上踏み込まない理由として、相手に「*彼氏がいた*」ということ挙げています。つまり、自分の「好き」という感情は、すでに成立しているカップルの排他性を尊重するという理由であらかじめ抑制されている。このような意識はM1-bの「*僕もダメ*」という発言からも確認され、グループ内で共有された。さらに、「*お話をする仲間だろうな*」という語りからは、性的関係を含まない関係に留まるべきだという意識が明確にうかがえる。つまり、「付き合う」という契約を結んだカップルは、同時に他の親密関係は持てないという性的排他性の規範に拘束されるのであり、またそれらの規範は、周囲の他者によっても共有されている。さらに言えば、排他的な関係を完全なものとするためには、性関係は必要不可欠なものといえる。つまり、挿入を含む性交渉を持つことが成員同士の排他性を確立するための通過儀礼 (initiation) となるのである。

ここで、女性グループ2のW2-aの語りを紹介する。W2-aは、娘が結婚できるかどうか心配した母親の勧めで結婚相談所を通してある男性と知り合った。そして何度かデートを重ねたあと、クリスマスの日に見物車のなかで「*割と不自然な形*」で「*付き合おう*」という言葉に彼に言わせる空気をつくりだして交際をスタートさせることになった。W2-aは、現在は、「*(性に関わる行為を)一応全部やっています*」と明言したうえで、性交渉を行うまでのプロセスを以下のように語った。

(PI) W2-a: *付き合った日にキスをした。見物車のなかで。*

筆者: *それまでは、抑えてた?*

(PI) W2-a: *あ、でも手は繋いでました。付き合う前に。で、(性交渉をしたのは)旅行先だったんで、2月とかでした。だからなかなか遅かったです。一般的には。(交際開始から)3ヶ月待った。多分、それなりに焦ってたと思う。*

以上の語りからは、「付き合う」という関係には性的関係が含まれることが当然視されていることがわかる。しかし、それ以上にW2-aの語りにおいて注目すべき点は、性交渉を行うまでに、交際開始から3か月が経過したことに対して、一般的なカップルと比較して「*遅かった*」と感じ、またそのことに対して「*それなりに焦ってたと思う*」と焦燥感を感じていたという点である。つまり、W2-aにとって性交渉を経験するまでは、カップルとして不完全な関係と捉えられているということが推測できる。「付き合う」という契約関係を結ぶということは、カップルの双方が、誰と性関係を持つべきで、誰と持つべきではないのかという排他的関係の境界を明確にする行為である。ゆえに、それらの排他性を担保する性関係（特に挿入を含む性交渉）を経験していないこと自体が、カップルとしての脆弱さを意味するのである。

(2) セックスをしないという行為が意味するもの

前項では、カップルにおける排他性意識とそれを支える性関係との関連をみてきた。しかし、男性メンバーの

なかには、性関係も含めて付き合うことによって生じる排他性を守る義務や責任を回避したいと語る者もいる。他方で女性からは、それらの男性の行動に困惑する語りがみられる。本項では、それらをジェンダーの視点から詳細にみていきたい。

a. 責任回避とその対処法—男性メンバーからの語り

まず、男性グループ2のM2-aは、「付き合う」ことが最近「面倒くさくなってきてる」と語った。その理由として、「付き合う」という1対1の関係においては、「しっかりしなあかんなあ」と、性関係の対象を一人の女性に限定するだけでなく、「彼女／彼氏」としてコミットメントしなければならないという意識が強く働くからだという。

M2-c: *なんか付き合ってる子と中途半端な関係で（行動内容が）あんまり変わらない感じがしてるから、あんまりその違いについて（付き合ってる／付き合っていないの間で）どっちがいいとかないな。*

M2-a: *俺、意識としては全然違うんやけど、付き合ってたってそういう適当な感じなのがめっちゃ楽やし、お互い都合のいいようにできるからそれはそれでそういう関係を築くのはありで、付き合ってたたら（セックスは）その人ひとりに一応自分はしてるから、しっかりしなあかんああって感じやね。だから付き合う方が大変やと思うんやけど。*

そこで、M2-aはそれらの責任を回避する対処法として、「添い寝」をするのだという。M2-a曰く、一緒に寝る異性とは「密着はするし、ハグもするし、気がむいたらキスもするけど、セックスはしない」のだという。彼がこのような行為を行う理由は、性交渉をすると女性の方から正式な交際（＝「付き合う」こと）を迫ってくる可能性があり、それを恐れるためだという。

M2-a: *そうそうそう。だから俺責任感のなさが、もうちょっと責任無い方がいいから（セックスは）やらないよ。添い寝でちょっと手だすぐらいがちょうどいいよ。セフレは向こうがちょっとがつつり来だす可能性が高いから、ちょっと面倒くさいかなあてことが多い。とか、「なんでやったん？」とか言い出すパターンとかもあるし。*

M2-c: *食い下がってくる人がおるんや。*

M2-a: *添い寝はね、いい感じで遊べるやん。もう一歩先（＝セックス）があるから。*

このように、「セックス」をしないということについては、同グループメンバーのM2-bも、「ごはん食べて、綺麗な夜景をみて、それだけでいい。べつにセックスにはこだわらない」と語った。

このような会話は異性混合グループにおいてもみられた。MixM-aは、「一個（＝多数いる異性の友人の中のひとりとセックスを）してしまったら僕のなかでバランスが崩れる訳。だから、そこまで踏み込まないっていう子は僕のなかでめっちゃいる」と、手をつなぐという比較的簡単なことも含めて性的関係を一切持たないと語った。なぜならそれは、MixM-aにとって、M2-aと同様に「面倒くさい」（＝付き合いを迫られる）ことになるからである。また、その場合の性的欲求の解消に関しては、「いなかったらいなかったで別に僕全然大丈夫だし。別にお店（＝買春）とかも行かないけど。なんか、そういう気になる子がいれば別にすれればいいだろうし」と語り、柔軟な態度を示している。このように、自分からは性的関係を積極的には求めないと語るMix-aではあるが、一方、女性からの誘いに対しては、「（体を）差し出してきたから、据え膳食えぬは男の恥みたいな。出されたものは最後まで食べるみたいな、育ちの良さ？」と冗談を交えながら最近の性交経験を語った。

このように、女性からのセックスの誘いには嬉々として応える姿からは、「セックス＝快樂を得る」行為として認識していることがわかる。しかし、それ以上に、「誰から嫁せられた責任なのか分からないけど、社会通念的みたいな。背負いがちなのか背負わされがちなのか。どっちかわかんないけど」（MixM-a）と語るような、セックスのイニシアティブは男性が握っており、したがってその行為の責任も男性が引き受けなければならないという認識と、それを回避したいという意識が見え隠れしている。

b. 性的関係がない継続的な男女関係への困惑—女性メンバーからの語り

他方で、このような男性の行為や関係性の築き方に対して、困惑しているという語りが女性グループ2と異性混合グループの女性メンバーのなかで見られた。

例えば、異性混合グループのMixW-bは、現在、恋愛感情を持っている異性の友人と、「間違いなく友だち以

上ではあるかなってというのは分かるけど、毎日連絡は取るわ、週1は会う」けど、「それ以上はしてない、言っていない」という関係を7ヶ月間続けているという。しかし、MixW-bは、今の段階では「決定的なゾーン」まで男女の関係として「入り込んでいる」という自信がないため、関係が壊れるのを恐れて告白できずにいる。

MixW-b: いやーわかんない、わかんないから言えてない。そういう瞬間があったりやっぱり脈ないなっていう瞬間があったりで、なんだかんだその流れで。

MixM-a: ほかの男友だちよりかは近いなっていう感覚は？

MixW-b: あるけど、その決定的なゾーンまでやっぱなんか入り込んでいるかなあって。

同じような会話は女性グループ2でも見られた。以下の会話からは、W2-aの友人が1年間程、特定の異性とデートを繰り返しているにもかかわらず、関係が明確にならないことに対して、彼女たちがどのように評価しているのかがうかがえる。

W2-a: 最近1年ぐらい毎週会ってるのに、一向に「付きあおう」って言ってこないっていう女性から苦情宣告っていうか、たまにそういう話をきいて。普通に、山登りにいくとか、映画にいくとか、デートにいくとか、ご飯にいくとか…。プレゼントとかお互いに5万とかするものを送り合ったり。(一同: えー!)

W2-b: なんかそれもう事故だね(笑)。逆にそれでもし性的関係になったとしても…。

W2-c: (性的な)関係があったら、それを目当てでいままでやってきたのかなっておもうけど、何をしたいのかまったくわからない。

以上、2グループにおける女性たちの会話で特に興味深い点は、男女の関係においてセックスを目的とした関係の方が、全く性的関係を持たずにデートを繰り返している関係よりも理解ができるという点である。つまり、そこにはカップル関係を築くうえで、男性から女性に性的関係を求めてくるべきだという期待や規範意識があることがうかがえる。

(3) 関係性の明確化志向

前項のように男性から女性に対して性的関係を求めてくるべきだという意識がある一方で、その前提として、まず「付き合う」という関係になることにこだわる意識が以下の女性グループの会話から確認できる。

W1-f: 付き合う前にそういうの(セックス)があっちゃうとダメになる方が多いと思うから極力無い方がいいと思う。男の人って追いかけてゲットしたら一歩引くっていうか安心感が出て追わなくなる人がいるから嫌だな。

W1-d: 私も最終的にうまくいかないと思う。

W1-g: 男の子たちはそういうのでも傷つかないと思う。ただの行動として割り切れるんだけど、女の子は気持ちに伴って傷つくと思うからしない方がいいと思う。

つまり、彼女たちは、付き合う前にセックスすると男性にとって「付き合う」インセンティブが無くなるため、まず「付き合う」という契約を結び、関係性を明確化すべきだと考えている。また、「女の子は気持ちに伴って傷つくと思うからしない方がいいと思う」というW1-gの語りにみられるように、彼女たちにとってセックスは、身体的なコミュニケーションにとどまらず、心的なコミュニケーションと捉えていることが推測できる。他方で、付き合う前に性交渉を持つことに対する嫌悪感はないと語った調査協力者であっても、お互いに好きな気持ちがあると分かっている場合のみに、セックスは限定されており、また、セックスしたあとには、関係性を明確にすることが必要だと説いている。

MixW-c: 逆に体から入って付き合うパターンもあるけど、あるけどなんかもう、言っていないだけでお互いそうなんだろうなって分かったうえでやってるから、それはちょっと違うんだよね。そういう意味では心ありきで体に行く。そういうこと(セックス)をやるとさ、ちょっと親近感はわく訳で、だからその親近感を友だちの方につなげていっていいのか、それともそれだけって割り切ったほうがいいのか宙ぶらりんっていうのが、不安っていうか嫌。気を使うわーってなってしまう。宙ぶらりんしてる自分が嫌いになる。

一方で、上記の調査対象者とは、異なる方法で関係性を明確化しようとしていたのが、女性グループ1のW1-gである。W1-gは、グループ・ディスカッション実施時には交際相手があったが、個別インタビューを行っ

た時には別れていた。グループ・ディスカッションの際に、W1-gは「家でずっと一緒にいた」「(排他的な関係性を)守りたいって思って、守ってたんじゃなく面倒くさいから守ってた」と「付き合う」という契約関係のなかで、排他的な関係を維持するよう努めていた。ただし、「面倒くさいから守っていた」という語りからもわかるように、W1-gが排他性を守っていたのは、交際相手に対して愛情や誠意を示すというよりも、揉め事を起こさず、平穩に過ごすために選択した行為であった。しかしその後、付き合いが破局した後にインタビューを行った際には、その間に不特定多数の異性と性的関係を持った経験を語り、自分自身の性行動は「**振幅が大きい**」と認識していた。ただし、W1-gのなかでは、「遊び」として性関係を持つ相手に関する明確な基準がある。それは、「付き合う」ことを全く意識しない相手だということである。その理由について、W1-gは以下のように語る。

(PI) W1-g: **クラブで会う人とは別にうまくいこうなんて思ってない。若くて馬鹿な子(笑)クラブで「高学歴のできる男」と出会っても付き合えるわけじゃない。遊び慣れてるでしょ。まず、彼女もいるかもしれない。自分がそれこそ恋愛偏差値高くないのに遊ばれて終わるっていうのが目に見えてるから。**

このように、W1-gのなかには、遊び相手は「若くて馬鹿な子」、付き合いたい相手は「高学歴のできる男」という対置関係がある。そして、遊び相手の「若くて馬鹿な子」とは付き合う気はないのにセックスをし、「高学歴のできる男」とはセックスをしないという明確な線引きがあった。その理由は、「高学歴のできる男」と付き合うことを望んでも、結果的に自分が「遊ばれて終わる」ことを危惧しているからである。このように、W1-gは、自分のことを守る術としてセックスする相手を区別して、傷つくことを回避しようとしていた。

V. 結論

本稿の目的は、若者たちの性に関する詳細な行動内容（例えば手をつなぐ、キスをする、性交渉など）や「付き合う」ということへの意味づけに注目することを通して、彼らにとっての「親密性」のあり様を質的データの分析を通じて考察することであった。分析の結果、調査対象者たちは、セクシュアリティが脱制度化したといわれる今日においても、カップルの性的排他性を守ろうとする意識に関する共通の語りが見られた。また、彼らにとっての親密性のあり方は、「付き合う」という契約関係を結ぶことによってカップルとしての儀礼的行為²が発生し、セクシュアルに排他的な関係（「性的排他性」）を要請する、いわば「制度的」な関係であることが確認できた。しかし、調査対象者たちの多くは（特に女性）、こうした制度的な関係に対して抵抗するのではなく、むしろ「安定」や「リスクの軽減」として捉え、より積極的に「付き合う」という関係を明確にしようとする意識が確認できた。ゆえに、「付き合う」までは手をつなぐことやキスをするといった行為に留め、最終段階としての性交渉（挿入行為）を持たないように制御していた。そこでは、セックスのみならず、自己開示コミュニケーションを誰とどの程度すべきなのかという一種の判断基準として、「付き合う」という関係性を明確にすることに重要な意味が付与されていた。しかし、その一方で、このような親密関係を負担に思う男性の調査対象者の存在も確認された。例えば、M2-aは、「俺責任感のなさが、もうちょっと責任無い方がいいから（セックスは）やらのよ。添い寝でちょっと手だすぐらいがちょうどいいのよ」とあえて「性交渉」（挿入行為）を行わない選択をとっている。しかし、W2-aの語りには、決して性に対する嫌悪感はなく、また、性に対して全く無関心であるとも言い切れない。男女関係における性行動の「責任」に関するこのような発言はM2-aのみならず、MixM-aの語りでもみられ、どちらかというとなりの方がより一層強く意識しているということが確認できた。

今日の社会において、「セックスが日常化した」という議論は、山田（2005）をはじめ多くの研究者によって言及されている。また、性規範については、近代社会だけに限って言えば、かつてほどの強い規範はないといえるだろう。しかし、若者たちがこうして自由に自らの身体性をコントロールしていることだけに注目して、若者たちの性規範が弱まったと言及することも、あるいは、性的関係を回避する様子から若者のたちの性が「保守化」したと捉えることもどちらとも早計だといえる。調査対象者たちの語りには、古典的なロマンティック・ラブイデオロギーの意識が脈々と、あるいは部分的には形をかえて継承されていることがみとれる。それゆえ、従来それらを審級してきた「セックス」を回避したり、あるいは逆の方向性に傾いて、ある種の逸脱的な行為を行う自分として不特定多数の人と「セックス」を行ったりして調整しているのではないかと推察される。具体的に言えば、個別の

行動内容において手をつなぐ、キスする、ハグする等の行為と性交渉（主に挿入行為）との間で一線を画し、使い分けを行うことで、理想化された男女における「親密性」のあり方を犯さないようにしていると推察される。

法的な効力を持たない恋愛関係においては、「純粋な関係性」によってニーズにあった人をそのつど選ぶといった関係も可能なはずである。しかし、日本においては、少なくとも今回対象とした調査対象者たちにおいては、「付き合う」という関係の背後には様々な責任と義務が伴うことから、未だに「制度」としての親密性の効力が強く、ギデنزのいう後期近代化した社会における「純粋な関係性」とは未だ距離があるよううかがえる。

しかし、ここでもう一步踏み込んで議論したい点は、かつてより自由度が高まった社会に関わらず、「付き合う」という関係性においては、なぜ「制度的」な親密性のあり様を自ら内面化し、さらにいえば、ある種の理想型として認識しているのかということである。その理由のひとつとしては、ギデنزが「純粋な関係性」の前提として提示する「自己開示コミュニケーション」の困難性があると推測する。そして、もうひとつの理由には、意識のうえでの生殖からの「非解放」があるのではないだろうか。

これまでも、現代の親密性をめぐる議論には複数の批判がなされてきた。なかでも、Lynn Jamieson(1999)は、ギデنزが主張するような「対等な当事者」同士の「純粋な関係性」というモデルにおいて、「権力」や「不平等」の影響が軽視されている点あげている。田淵(2013)は、Jamiesonの批判をもとに、日本社会におけるパートナー間の権力関係や家事・育児の分担など非対等な異性愛カップルのあり様が未だに大きく変化しないなかで、当事者間の交渉に委ねられた関係において「親密性の変容」がどこまで進みうるのかは疑わしいと言及する。以上のような田淵の議論はその通りであるし、ギデنز自身も親密性の変容は、「女性の自立性の増大と自由に塑型できるセクシュアリティ」に依拠すると言及している。しかしながら、本稿では、異性間における権力の対等性は必ずしも、常に男性の方が優位で自立的であるという訳ではなく、男性たちにとっても負担の大きいものであるという知見が示された。そこには「孕ませる」性として課せられる男性特有の責任意識が関係しているのかもしれない。つまり、生殖と「セクシュアリティ」を結び付けるような意識が技術的な進歩とは別にして残存しているということである。しかし、この点については、本研究のデータではそこまで深く言及はできないため、今後の課題としたい。

【注】

1. 設問「あなたはこれまでに異性と性交渉をもったことがありますか」を1. ある、2. ないで回答。ただし、第13回調査の選択肢は、1. 過去1年以内にある、2. 過去1年以内にはないが以前にはある、3. ないの回答で算出している。
2. 儀礼的行為とは、集団の成員のメンバーシップを高め、成員間の連帯感を強化するために、成員が協同して行うべく社会的に規定された行為のこと (Collins 1982)

【文献】

- 石川由香里(2007)「情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差—〈純粋な恋愛〉志向をめぐって—」
日本性教育協会(編)『「若者の性」白書 第6回青少年の性行動全国調査報告』小学館: 81-100.
- 大森美佐(2014)「若者たちにとって「恋愛」とは何か—フォーカス・グループディスカッションによる分析から—」『家族研究年報』(39): 109-12
- Giddens,A,(1993) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press (=松尾精文・松川昭子訳(1995)『親密性の変容』而立書房)
- 草柳千早(1996)「恋愛二元論というレトリック」磯部卓三・片桐雅隆(編)『フィクションとしての社会—社会学の再構成』世界思想社
- 国立社会保障・人口問題研究所(2011)「第14回出生動向基本調査・独身者調査」
(http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp)
- Collins, R. (1982), *Sociological Insight: An Introduction to Non-Obvious Sociology*, Oxford University Press (=井上俊・磯部卓三訳(1992)『脱常識の社会学—社会の読み方入門—』岩波書店)
- Sharon Sassler (2010) "Partnering Across the Life Course: Sex, Relationships, and Mate Selection", *Journal of Marriage and Family*, 72 (June 2010) : 557-575
- Jamieson,Lynn (1999) "Intimacy Transformed? A Critical Look at the 'Pure Relationship's", *Sociology* 33(3): 477-494

- 田淵六郎 (2013) 「家族研究と『親密性』」上智大学『社会学論集』37:17-34
- 谷本奈穂 (2008)『恋愛の社会学「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社
- 筒井淳也 (2008)『親密性の社会学 縮小する家族のゆくえ』世界思想社
(2013)「親密性と夫婦関係のゆくえ」『社会学評論』64(4):572-588
- 永田夏来 (2008)「若者と『軽く』なる性」羽淵一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣:141-161
- 山田昌弘 (2005)『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣